

稲荷山古墳保存整備事業

—平成11年度 確認調査の概要と復原設計—

西 口 正 純

1 はじめに

稲荷山古墳は、昭和12年頃の土取りにより前方部が完全に失われた状態で今日にいたっている。昭和53年に金錯銘が発見されて以来、全国から見学者が訪れることとなった。後円部だけの墳丘は見学者に誤解を与えることが多く、また、昭和51年に一部復原された内堀の形は見学者に誤解を与えるとともに、堀の水による浸食で、古墳の保存状況が悪化していた。これらの問題を解決するために平成9年度から平成17年度までの予定で稲荷山古墳保存整備事業にとりかかっている。

このうち、平成9年から平成11年度にかけては、範囲確認のための発掘調査を行った¹。平成12年度は確認調査の成果に基づいて、復原プランを作成し前方部の復原造成工事に取り掛かった。

今回は、平成11年に行った確認調査の概要と、復原設計の基本的な考え方について報告を行う。

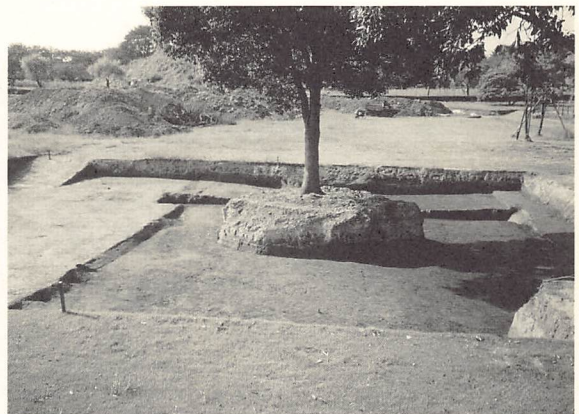
2 平成11年度確認調査概要

平成11年度の調査は、前方部南側の中堤と外堀、後円部造出し、後円部北側内堀と中堤から外堀の範囲確認調査を主体に行った。

調査区は、1区(K地区)から9区(S地区)の9区画で、約2,280㎡である。遺物の整理に着手していないので、遺構の検出状況を中心に報告する。

K地区

K地区は、前方部南東側の内堀外縁コーナーと中堤、外堀外縁コーナーの確認を目的に調査区を設定した。その結果、内堀外縁のコーナー、中堤、外堀を検出した。外堀にあたる部分は、外側のコーナーと外縁プランが水田耕作（耕地整理）等の攪乱により検出できず、中堤寄りの一部で覆土を検出するにとどまった。中堤は幅約14mで埴輪列などの遺構は検出されなかった。堀底のレベルは内堀が約16.1m、外堀が約16.3mで外堀がやや浅い。



L地区調査全景



L地区遺物出土状況

出土遺物は、内堀から円筒埴輪片、外堀から円筒埴輪片と形象埴輪の部材と考えられる鈴の土製品が出土した。

L 地区

古墳南側の主軸にあたる部分で、中堤と外堀の範囲確認を行った。いずれもK地区からつながる直線的なプランが検出された。外堀は覆土が検出面から15cm前後と浅く、堀底の標高は約16.2m、幅は約12mである。中堤は幅約14.5mで、埴輪列などの遺構は検出されない。

出土遺物は、外堀から埴輪片が出土する。中堤寄りに出土分布が集中する傾向が見られることから、中堤上に埴輪列が存在したことが推定される。

M地区

内堀の外縁コーナーから丸墓山周堀にかけて調査区を設定し、現況の内堀コーナーから中堤と外堀の外縁コーナーを検出した。外堀には、コーナー部分のやや北側に地山を約3m幅で掘り残した部分が検出された。航空写真で染み状に認められる部分にあたり、中堤への渡り堤（ブリッジ）と考えられる。なお、外堀は丸墓山古墳の周堀と重複していないことも確認できた。また、外堀外縁コーナーはやや南側に開き気味に屈曲している。外堀底の標高は約16.34mである。

出土遺物は、円筒埴輪片と人物埴輪（頭部）、土師器坏・甕、不明土製品が出土する。

N地区

平成9年度に調査が行えなかった後円部造出し先端部分と、くびれ部に調査区を設定した。造出し部は、先端部分が用水路などで攪乱を受けているためプランが不明瞭である。また、くびれ部には東側くびれ部と同様に掘り方を持つことが確認できた。標高は、造出し上面で約16.7m、くびれ部付近の堀底が16.34mである。

出土遺物は、円筒埴輪片がくびれ部側に多数出土した。また、須恵器坏・甕が少量出土する。

O地区からS地区

K地区からM地区の調査で不明瞭な部分について設定した、補足調査のトレンチである。プランの上面での確認を原則とし、覆土の調査は行っていない。

O地区は、南東部分の北側の延長を確認するために設定した。現在公園施設として池が造られている南側にあたる。内堀外縁から中堤と外堀のプランを検出した。M地区で確認したそれぞれのプランの延長上に検出している。わずかに検出した内堀と外堀の覆土には埴輪片が包含されている。

P・Q地区は前方部南部の周堀プラン（剣菱形）の検証と3区外堀コーナーからの繋がり及び1



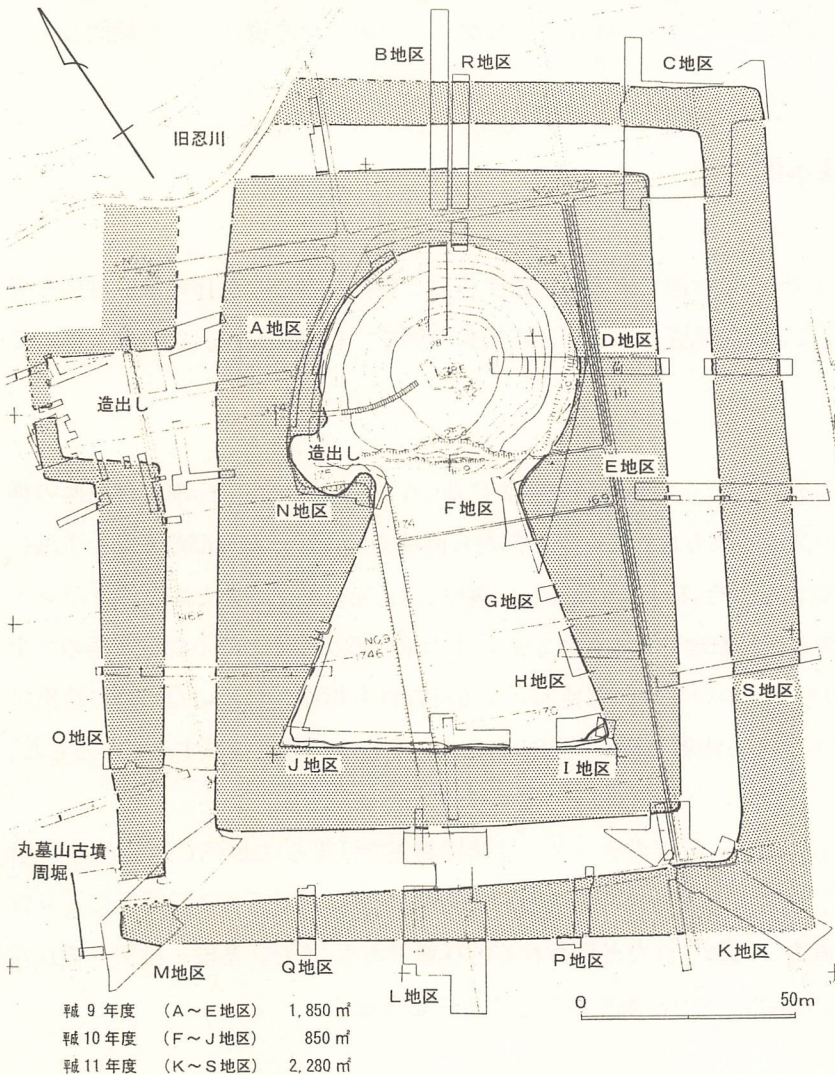
M地区遺物出土状況



N地区遺物出土状況

区で確認できなかった外堀プランの推定のために行った調査である。剣菱形プランの問題は、K地区から各調査区のプランが調査の結果、直線的で検出されたことから中堤と外堀プランから剣菱形を推定できる要素は確認できなかった。また、M地区の外堀コーナーは開きぎみに屈曲しながらQ地区で検出したプランに繋がる。R地区は平成9年度調査B地区と共に主軸上にあたる重要な部分で

あるため、拡張して調査を行った。その結果、C地区で確認されたプランの延長で、主軸に直行する位置に外堀、中堤と後円部墳裾ラインが検出できた。このことから、後円部北側のプランが剣菱形になる可能性は確認できなかった。また、墳丘裾部分に検出された狭い平坦部と墳丘に沿った溝は、基段と墳丘造成に関する遺構の可能性も考え慎重に調査を行った。しかし、旧表土から約1.5mの削平を受けている点と溝の覆土の状況から耕作と墳丘部の開墾により出来た平坦面と根切り溝であるとの結論を得た。S地区は、K地区で検出できなかった外堀プランを復原



稲荷山古墳確認調査区位置図

する情報を収集するために、K地区とE地区の間に設定した調査区である。それぞれE地区とK地区で検出したプランの延長上に内堀外縁プランと中堤、外堀プランを確認した。中堤に埴輪列などは検出されていないが、内堀と外堀覆土には埴輪片が包含される。

以上の調査で、稲荷山古墳の外堀まで含めた範囲の全体像を概ね捉えることができた。墳丘の主軸長は、削平を受けたレベルからの復元値が119.8mとなり、以前より公表していた120mと同じ結果を得たと考えてよい。

周堀については、方形の二重堀である事を追認する結果となった。また、後円部と前方部側の形態については、いわゆる剣菱形を証明するデータは得られなかった。ただ、前方部側の周堀と中堤は、主軸に対して直行せず前方部に向かって右肩(東側)上がりとなる。中堤の幅は、西コーナーが広く、

外堀の幅は西コーナーに向かって狭くなる。

丸墓山古墳との重複については、M地区内に外堀プランが検出でき重複していないことが確認できた。昭和48年調査で確認した丸墓山古墳のプランと合わせて考えると、両古墳の間隔は、確認レベルで約10mあり互いの堀壁面を復原しても重ならないことが推定できた。また、両古墳の周堀が接近する部分で稲荷山古墳外堀に渡堤(ブリッジ)が確認されたが、この部分が墓道としても機能していた可能性が考えられる。

3 稲荷山古墳復原の基本的考え

復原の範囲

当初の計画では、平成15年までの7年計画で前方部の盛土復原と外堀を含めた全体の復原計画を考えていた。しかし、平成11年度に計画の見直しを行い、内堀の範囲までの復原に絞った整備を行うことに計画の変更を行った。

前方部平面プラン

平成9年度から平成11年度にかけて行った範囲確認調査に基づいて設計を行った。前方部東西の裾プランについては、昭和42年の調査結果も含めてくびれ部から直線で延長し、前方部最先端を主軸に直行するラインで延長して交差する点をコーナー部として復原した。先にも述べたとおり裾プランとコーナー部分については、開墾と耕地整理による攪乱が激しく本来の形状をとどめる部分が極めて少なかった。また、前方部前面の形態については、剣菱形となる可能性も指摘されていたために慎重に調査を行った。しかし、これに対応する内堀外縁も直線であることから、直線で復原することとした。

前方部墳丘立面プラン

前方部の立面形態を復原するための、直接のデータは発掘調査では得ることができない。現在参考とすることができる資料は、昭和12年国史跡指定を受ける際に後藤守一、三木文雄両氏により作製された測量図と前方部削平直前に撮影されたと思われる古写真である。また、基段・段築・墳丘勾配などについては、後円部での確認調査の結果を参考とすることとなる。

基 段

まず基段についてであるが、前方部の発掘調査では確認することができなかった。これは、前方部に限ったことではなく、昭和初期に行われた耕地整理により当時の地表から約2m弱、古墳時代の旧表土上面レベルから約1.5m下げて古墳ぎりぎりまで削平した上で、畑を水田化したことにより基段部分が破壊されたことによる。また現況の墳丘裾ぎりぎりの部分には溝がめぐることが発掘調査で確認された、これも覆土の状況から近代以降のものであることが確認でき、開墾による根切溝であることが判明した。しかし、他の同時期古墳の例を見ても墳丘までの間に基段をもつ例が多いことから、基段の復原を行うこととした。

基段幅の復原根拠は、内堀の立ち上がり外角を50度として古墳時代の旧表土上面とした標高18.0mまで立ち上げた点から墳丘の間の1.8m幅を基準とした。

段 築

段築については、後円部の確認調査で標高22m地点に約2m幅の平坦面が確認されている。これに

より、後円部墳丘は2段築成であることがわかっている。また、墳丘裾に基段をもつと考えられることから見かけ上は3段築成と見ることもできる。削平された前方部の調査では前方部段築の情報を得ることができないため、後円部で確認されたデータを前方部に援用することで前方部も2段築成とすることとした。段築の標高についても後円部で確認された標高22mとする。後円部段築と前方部段築に比高差を持つ例があるが、根拠とするデータがないので同一の標高で復原することとした。

段築上の埴輪列は、内堀での出土状況や後円部段築部での出土などから存在していた可能性が高いが、いずれの地点からも埴輪の設置痕跡を確認することができていない。これらのことから今回は埴輪列の復原は行わないこととした。

前方部平面と立面規模

前方部先端のプランは、前述の理由から直線での復原とした。復原したコーナー間の幅は約75mとなる。また、前方部最高地点の標高は三木実測図³から後円部との比高差が等高線から1m程度であることがわかる。後円部の最高標高は、昭和44年に測量した航空測量図により確認できる最高標高が28.6mとあることから、前方部の最高標高を27.6mとした。

また、この実測図の原図と思われるものには、前方部最上部に「後円部墳頂より六十八糎低し」との註書きされたものがある⁴。

後円部の直径は南北主軸部分では、約30m、東西では東側のプランが外側にやや膨れる傾向があるために、32から33mとなる。調査の成果を踏まえた後円部先端部分から前方部先端部分までの主軸距離は、119.8mとなる。一方、検出された外堀を含めた主軸上の距離は、約200mで外堀造出しを含めた東西の最大幅は、約170mである。

前方部頂上と墳丘斜面

墳丘法面の傾斜角度については、後円部の調査で確認できた部分を参考に検討した。後円部の腐食層部分を取除いた現在の傾斜は約20度であった。これに段築の幅を1.8mで復原した端の点で斜面を復原すると約30度となる。現況の面は墳丘の土砂が流失した結果であることから、築造当時は30度前後の傾斜があったと考えられる。また、土木的にも安定勾配であるためこの傾斜角度を原則とした。

三木測量図によれば前方部頂上部に平坦部分が存在したことが読み取れる。これによれば、墳頂部平坦面の後円部側への奥行きは最低10mあったとわかる。

前方部墳頂から後円部へのスロープ部分の復原には、後円部に取り付く部分の標高と幅が必要となる。前方部は後円部に一部食い込む形で土取りが行われているために前方部への擦り付け部分は残されていない。この部分も三木測量図と昭和44年航空測量図を参考に、コンタが開き始める点から標高24から23mの範囲であることがわかる。

くびれ部

くびれ部は、最小幅部分の掘り方内側の幅が34mである。左右共に掘り方の外側は、緩やかにカーブをしながら後円部と前方部につながっている。西側のくびれ部は、その西側に造出しがつくためにやや前方部寄りからカーブが始まり、東側に比べて埋め戻し整形土の幅が広い。くびれ部の頂上部すなわち前方部スロープの最も低くなる部分の標高は、三木測量図等高線と航空測量図から推定すると24mから23mの間に収まることがわかる、また、墳丘の勾配は、基準とした30度より大きくな

る。このことからくびれ部の造成には特にシガラ工の設置を十分に行うこととした。

周 堀

堀の立ち上がり傾斜角度は、発掘調査の結果残りの良い部分で約50度の傾斜であった。この角度で堀底面からこの角度で推定復原したプランは、平面から復原したプランと整合性があることが確認できた。

一方、この角度で堀の壁面を復原した場合、斜面の安定が保てない。築造当時は切土によるために50度の傾斜は安定勾配といえるが、盛土で復原する場合は30度前後の勾配でなければならないために、35度の傾斜で復原することとした。このことにより、基段復原点を基準にこの角度で堀の傾斜面を作ると、実際の堀底より堀の内側となり、同時に遺構面の保護にもつながる。

内堀の修景は、公有地化された部分を対象する。現況は、公園面から約10cm程度下げて一時的に埋め戻した状態である。さらにこの面から若干下げて、内堀の範囲表現を行い、何らかの植栽を行って景観を整えることとする。

後円部造出し

後円部造出しは、後円部西側くびれ部付近に位置している。昭和初期の耕地整理以前に、前方部西側に沿って作られた用水路が、造出し先端部を通り後円部北側に伸びていたために先端部分がこの用水路により削られている事が発掘調査で確認されている。

規模は、後円部墳丘裾から約10mの奥行きを持ち、先端部分の幅が約17mである。造出し部分の上面は、削平により現状をとどめていなかったため、埴輪の配置等の情報は得られていない。

また、上面の標高は、基段部の復原標高とした18mとした。側面プランについては、おおむね当時の状況をとどめていると考えられるが、先端部分は現況の形を参考とした。

4 おわりに—今後の事業計画—

稲荷山古墳保存整備事業は、平成17年度を最終年度として事業を行っている。今後3か年でおおむね前方部の造成を行い。平成16年度に、墳丘法面の整形・緑化植栽、内堀修景を行い、平成17年度に案内板の設置と報告書の刊行を予定している。

なお、本文中に掲載した図および規模・法量等の数値は、報告書の刊行をもって正式の値としたい。

註・参考文献

- 1 宮 昌之 1998 「《資料紹介》稲荷山古墳出土の須恵器 —平成9年度発掘資料— 『調査研究報告 第11号』 埼玉県立さきたま資料館
- 2 西口正純 2000 「稲荷山古墳確認調査の概要 —平成9・10年度—」 『調査研究報告 第12号』 埼玉県立さきたま資料館
- 3 図中には等高線の数を表す数字が付されているが、絶対標高を表示したものはない。したがって等高線に標高を当てることができない。墳頂部を0点として、1m単位で低い点を記録することで作成した図面と考えられる。
- 4 埼玉新聞社 1978 『稲荷山古墳・鉄剣が秘めた古代の謎』の挿図より